

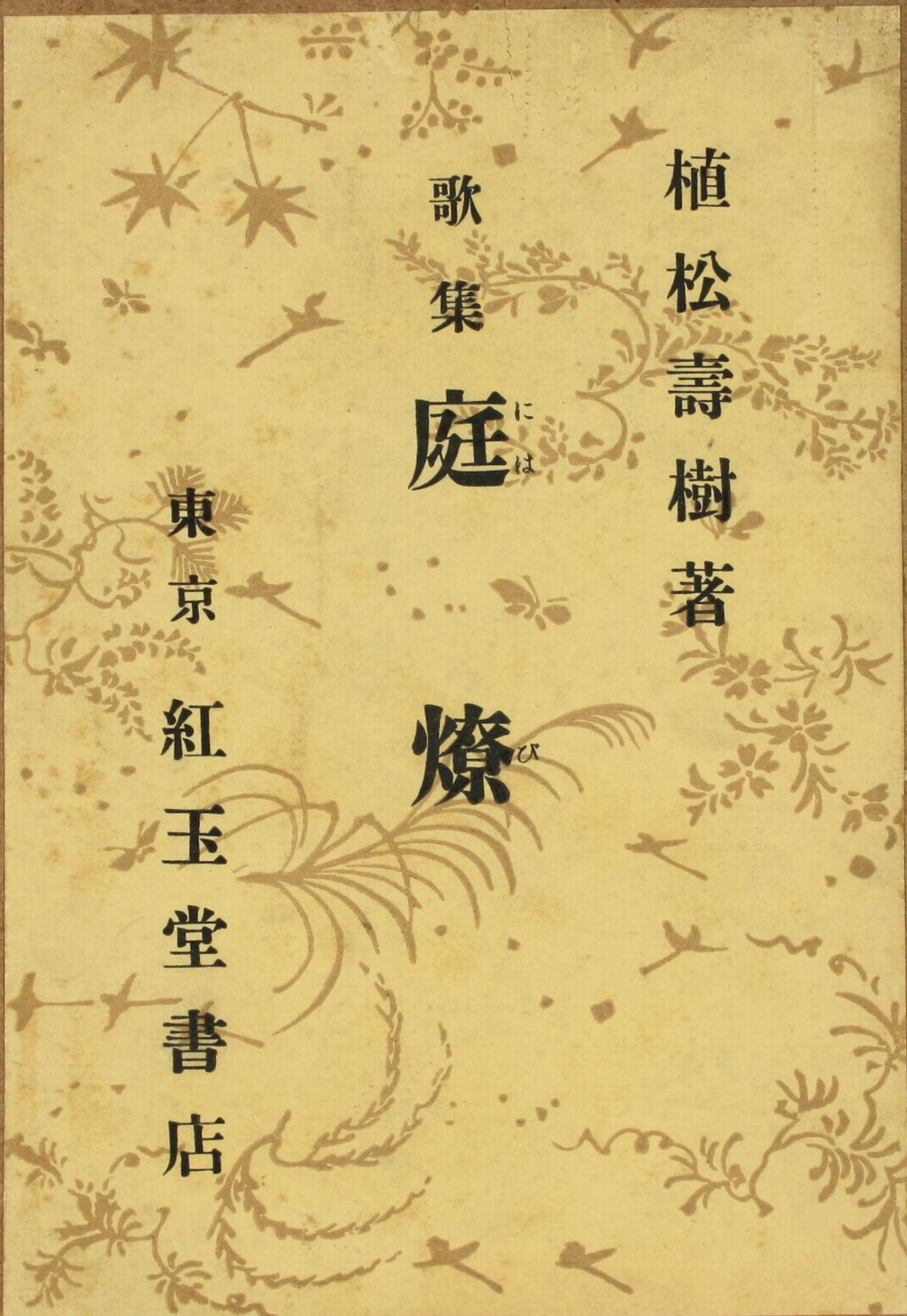
植松壽樹著

歌集

庭には

燎ひ

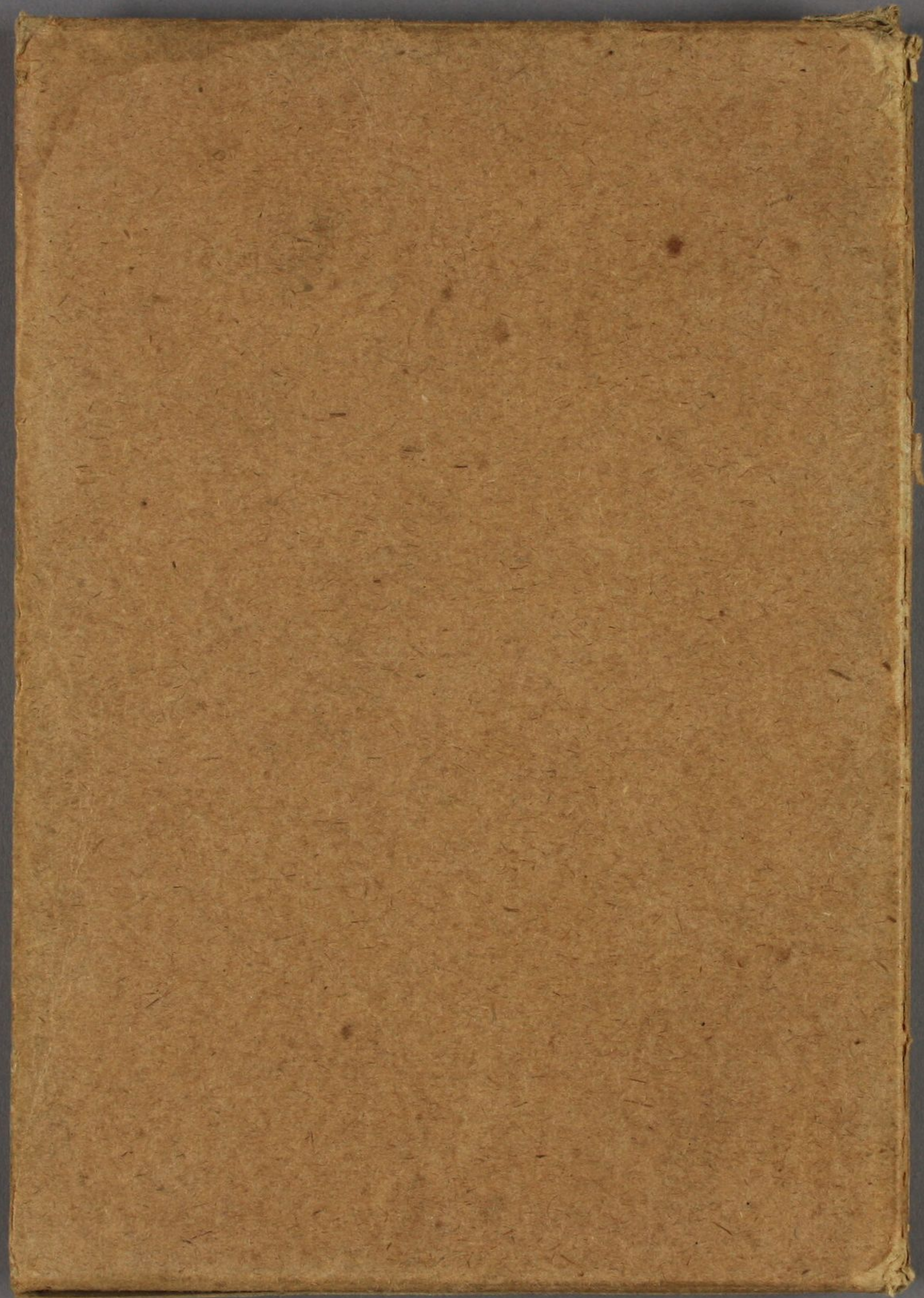
東京 紅玉堂書店



歌集庭

燎

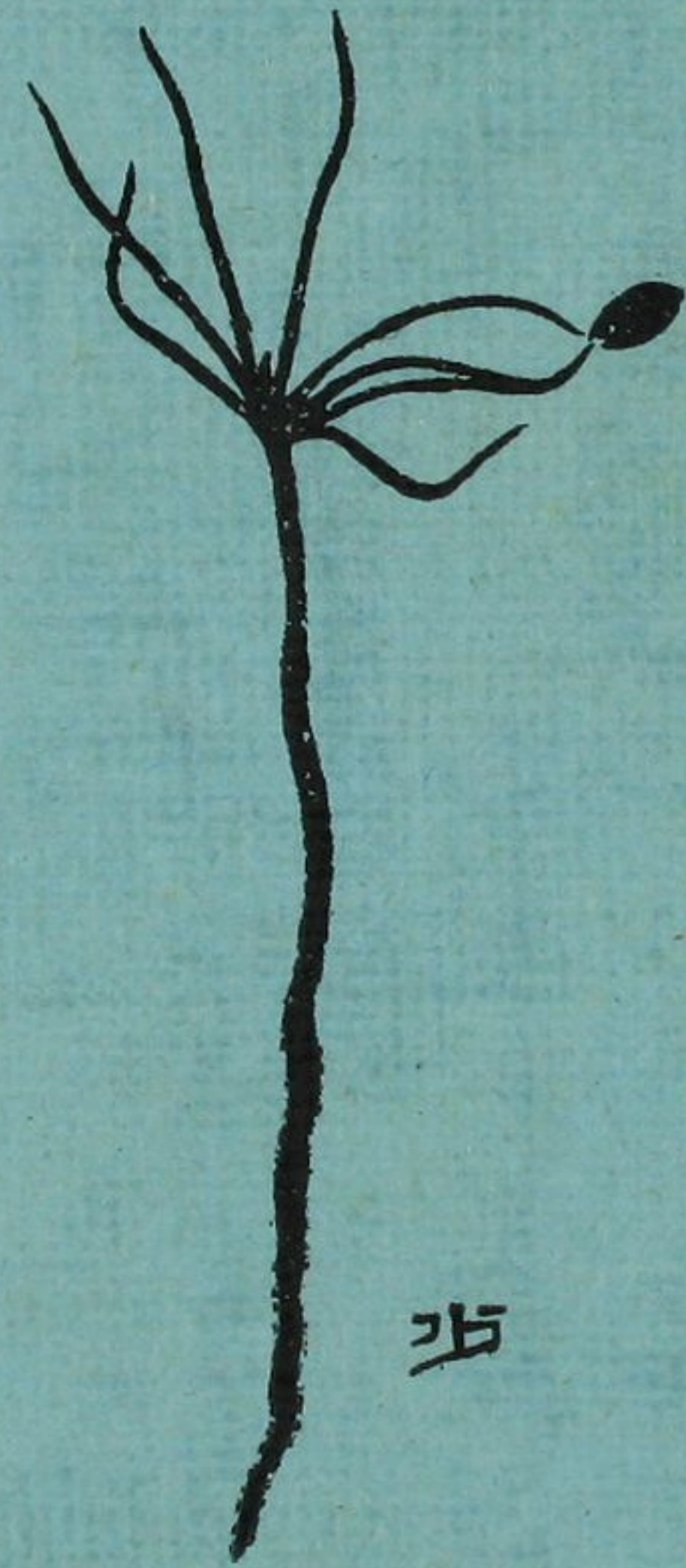
植松壽樹著



集 歌

# 燎 庭

著 樹 壽 松 植

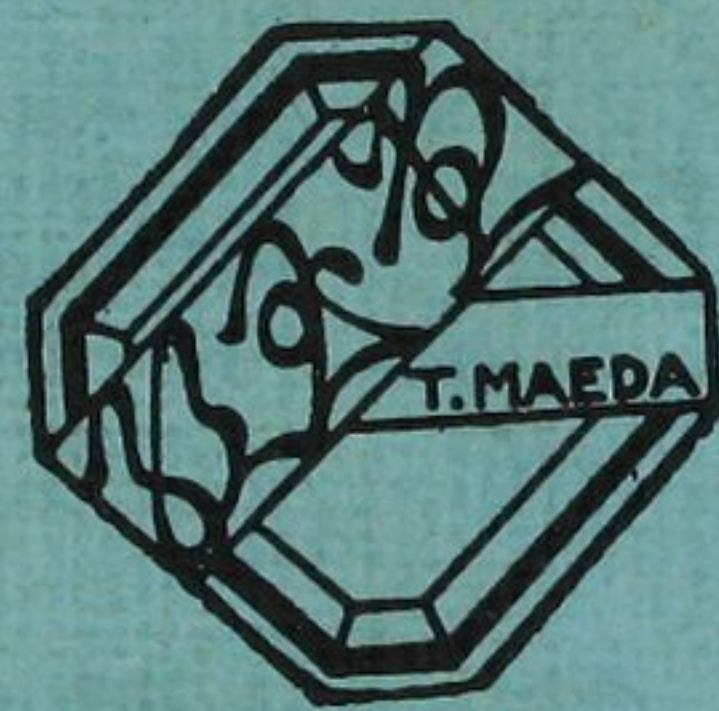


25

歌集  
庭燎

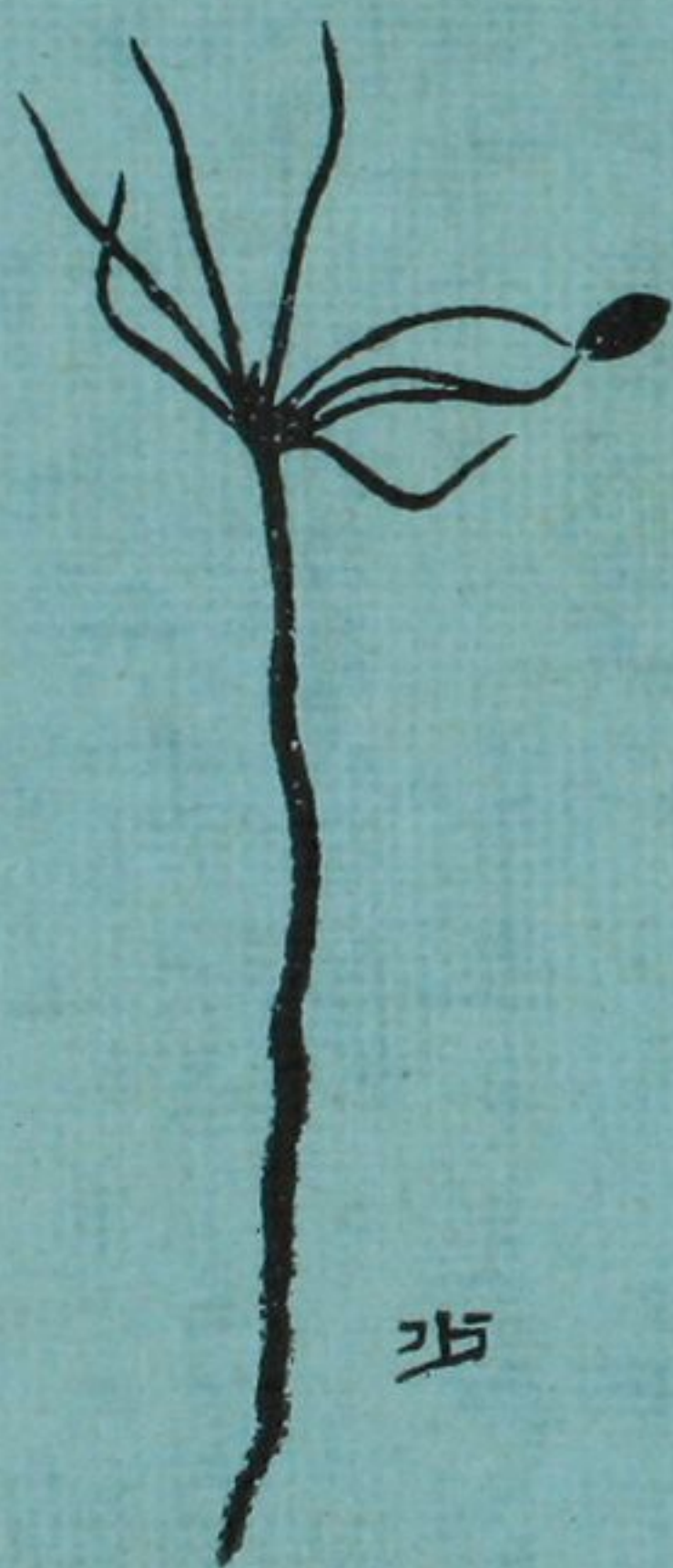
(改版)

植松壽樹著



集 歌  
**庭 燎**

著 樹 壽 松 植



少

歌集  
庭燎

(改版)

植松壽樹著





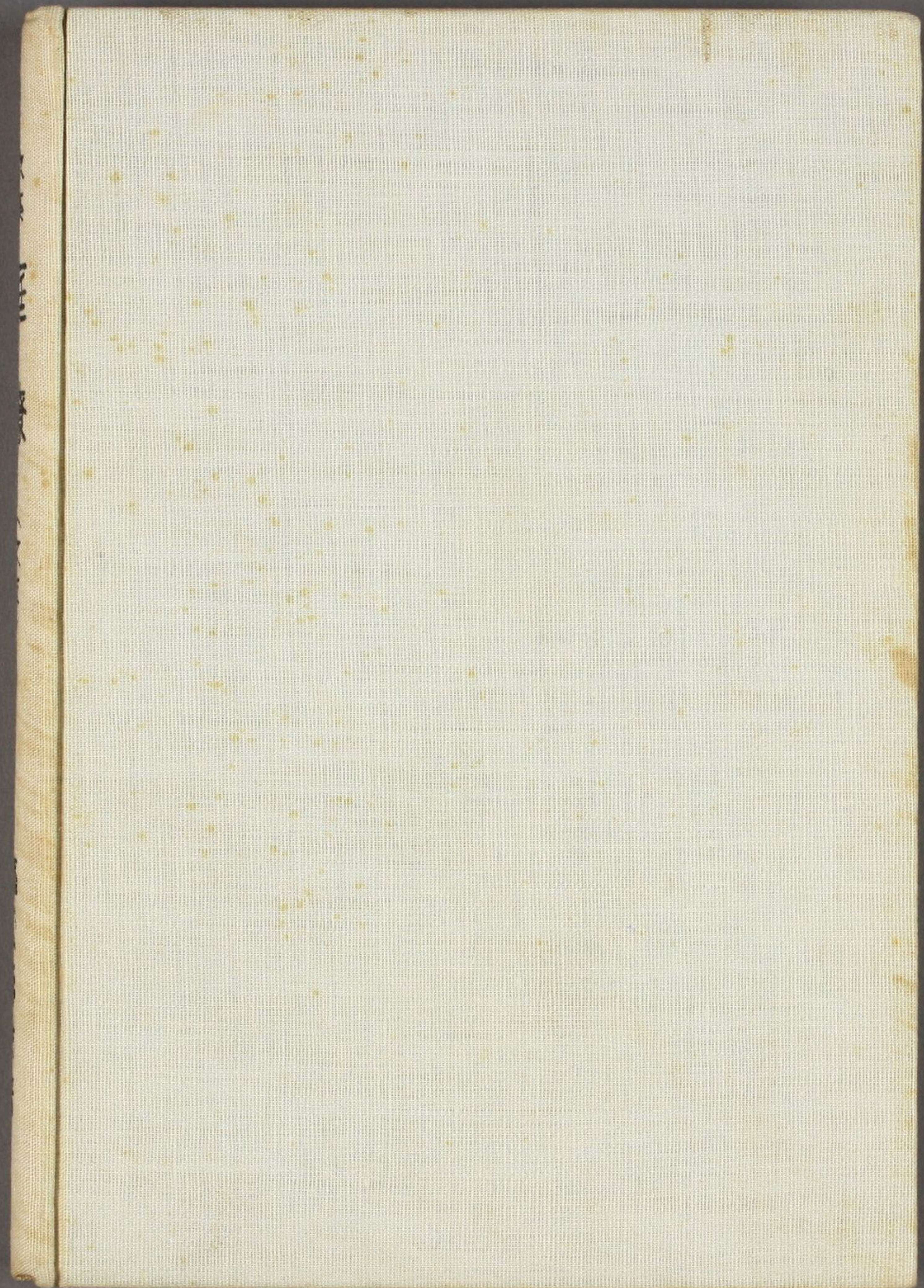
215



歌集庭燎

(改版)

植松壽樹著





植松壽樹著

『國民文學』叢書第二編

歌集  
庭には

燎び

(改版)

東京 紅玉堂書店版

### 改版に際して

此の集は、大正十二年の大震災に紙型全部を焼失して、爾來絶版のまま、今日に到つたものである。出版元紅玉堂では、焼失した蔵版書を順次復活したい希望で、着々歩を進めてゐたが、今度いよいよ私の『庭燎』にもそのお鉢が廻つて來た。『庭燎』は、謂はゞ舊集に捨て、來た抜殻である。この儘版を絶つても差支へないやうな感がないでもないが、しかし、處女歌集として、流石に深い愛着を持つてゐる。折があつたらもう一度人に讀んで貰ひたいやうな氣持を禁じ得ないで居る。

私はたうとう『庭燎』を復活することに決めた。紅玉堂では、これを舊版と同じ體裁にして出さうと云つて居る。嬉しいことである。

唯内容には舊版のまゝでは満足しがたいところがあつて少し改めた。先づ順序を製作年代順に編變へた。『庭燎』六年間には多少の進展があらうと思ふから、それには経過の跡を辿つて讀んで貰つた方が便利である。辭句の改むべきものを改めた。意に滿たないところは限りなくあるが、それを今の心持に合ふやうにするのは殆ど新作をするに等しい。私は單に語格上いかゞと思はれる數個所を改訂するに止めた。脱捨てた殻を今更繕ふにも及ぶまいといふ氣もするのである。

『庭燎』の初版は、幸に多くの先輩から懇篤な批評を受けることが出来て、私にとつては意外な喜びであつたが、更に別の喜びを受けることが出来た。それは、一は、久しく私を尋ねて居た舊友が、『庭燎』の出版によつて、圖らず私の消息を知つて手紙を呉れたことである。

一は、庭燎の添書きの中に書いた宗耕一郎君が、硯工不旱生となつて私の前に現はれたことである。かうして、久しく絶えてゐた二友と再び消息を通じるやうになつたのは全く思設けぬことであつた。些事ではあるが、書かずには居られないでこゝに書添えた。

大正十四年八月二十六日

小石川原町の寓居に於て、  
無花果の葉に雨を聞きつゝ

植 松 壽 樹

口 裝

繪 幀

大和法起寺

松 人

岡 見

映 少

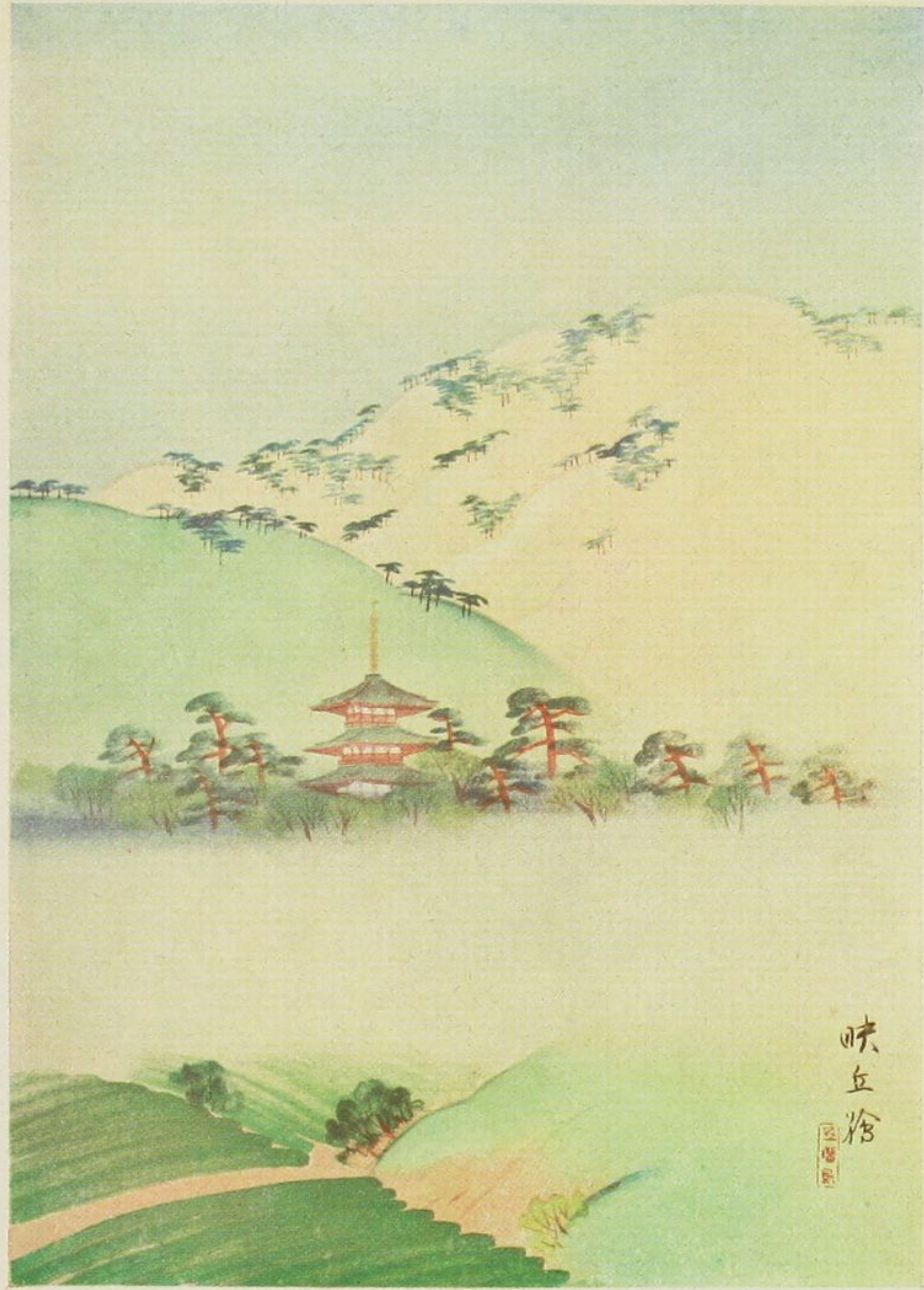
丘 華

氏 氏



映丘  
拾





映丘舎  
[Red Seal]

庭燎目次

大正四年

竹獨樂	三
桐の花	五
芍薬	七
雜詠	八
大弓	一〇
泰山木	二二

大正五年

蝶	.....	二四
父	.....	一六
猿	.....	一九
今熊山	.....	二二
庭前	.....	二三
雜詠	.....	二四
枇杷の花	.....	三三
西遊雜詠	.....	三五

大正六年

挽歌	.....	四九
九品佛	.....	五六
雜詠	.....	六一
新	.....	七〇
大阪へ	.....	七一
奈良西郊	.....	七六
拾	.....	七八
大正橋附近	.....	八〇

大正八年

海邊一夜	101
安倍文珠院	104
微恙	106
住吉	109
父の日	111
兄と遊ぶ	114
病後	116
病床雜詠	122

大正七年

櫛	81
枇杷の花	83
枝堀	86
病中	92
布引山	95
土曜日	96
日曜日	99
粉雪	100

大正九年

梅雨の頃……………三四

貴船……………二八

六甲山上……………三三

淡路……………三四

小豆島……………三九

蹉跎村雜詠……………四三

折々の歌……………五二

村に住みて……………五三

宇治……………一五

硯……………一六

室津……………一七

洛北……………一八

南瓜の花……………一八

彦根城址にて……………一九

卷末記……………

大正四年

六十首

竹  
獨  
樂

眼を閉ぢて深きおもひにあるごとく寂寞とし  
て獨樂は澄めるかも

しんしんと立澄む獨樂に六月の青葉の風は光  
りたりけり

玲瓏と澄すまのよろしも竹の獨樂ほがらかに音を  
なりいでにけり

しんしんと湧きあがる力なにもものも彈はき飛ば  
さむ竹の獨樂あはれ

## 桐の花

桐の花わが思ふ子が往きかよふ徑みちのほとりに  
散りにけるかな

桐の花まばらに落ちて思ふ子がゆける足あと  
しのばしめたり



桐の花うすむらさきに暮れなづむ雨の夕ゆふはま  
ぎれてを咲く

○

しるしなき戀をもすると嘆きつつ詠みて残せ  
るいにしへ人はや

芍  
薬

戸開けば瓦斯のあかりのほの青く流れてそこ  
に芍薬の花

莖のうへに芍薬のはな今はなしひよろりと高  
き芍薬の莖

## 雜詠

春芽はも今はかぐろみ柏の樹とこはならねど  
ものさびにけり

夏くれば柏ふたたび新芽ふさいよよ物さび静  
もり立つも

小夜中の天のかぐろさ見つむればその一とこ  
ろ明らみきたる

桐の葉に小夜中の雨降るさけばげに幽けくも  
ふれるなりけり

いささかの怒の後のさびしかも怒ののちに物  
食ひ居れば

## 大弓

朝はやくしづもる中にわが矢はも射あてにければ高く音せり

引きしぼりねらひすまして放たむとするこのたまゆらの心尊しも

生いものの生の命もとりぬべき力こもりて鏃やぶひかるも

若林正行先生

老の身のわが師ありがた弓とれば曲れる腰もたつと云はずやも

## 泰山木

手にとりて見がたきものにわが思ひし泰山木  
の花いまぞ手にしつ

手にとれば花はいよいよ大きかり花はいよ  
よ真白かりける

すがすがし泰山木のはなびらよ盃として酒飲  
むべかり

日に照りてしづもり立てる泰山木日に照りて  
葉は濡るるが如し

かぜ吹けばゆららに揺るる泰山木こずゑに大  
き花一つつけ

## 蝶

眞夏空ひかり溢れてみちの上に蝶一つ飛ぶま  
つしろの蝶

おどろきて見つむればこれ白き蝶ひらひらと  
して飛びてゐるなり

夏の日の光の中に飛びてゐし蝶ふと見えす柳  
の青さ

東京のこのまんなかに蝶の來て遊ぶ思へばさ  
びしかりけり

眼とづれど日の明るさは限なし日のあかるさ  
は臉しみとほす

## 父

父とわれ争ふことも親しげに語らふこともあ  
らざりしかな

吏わとなるなゆめとぞ父は戒めきはかなき吏に  
て父はありしなり

七日目に一日の休おほかたはいねて休みさか  
なしもよ父

汽車にのりてはるばる來り父の骨を拾ひし人  
も今はあらずけり

横須賀、舞鶴に在任中の父は、手づから諸種  
の釣道具を作りて海に出づるを娯としき。釣  
道具今なほ手提籠の中に残れり

いくばくの章魚釣りけむか古びたる章魚釣道  
具みればかなしも

丹後の海かそけくも鳴りここだくの水母うか  
びて今かもあらむ

猿

秋の日の植物園にわがはひり猿見て居ればさ  
びしくなりぬ

白白とかわける檻の土さびし猿はひたすら物  
食ひゐるも

皮むきて物食ふ猿の手はかなし人間の手に似  
たるなりけり

人間の言葉を知らぬ猿なれば人間の顔は見ざ  
りけるかも

いつばいに秋の日させる檻のなか猿ひそまり  
て蚤をとりをり

### 今熊山

武藏の今熊山のいただきに水の音ききて下り  
て來にけり

今熊の山頂の水うれしみつ神主の妻に物言ひ  
にけり



少年のむぎわら帽子ひかるなり向うにつづく  
青の山なみ

多摩川

大木おほきの多摩川やなぎ枝垂れずその葉ひそかに  
ゆれて光るも

庭前

いささかの土の割目に流れいりて消ゆらく水  
の光りたるかな

柿の樹は小さかりけれ實をもたず秋はやく葉  
をおとしたりけり

## 雜詠

河口慧海師西藏將來品展覽會にて

窓の外の秋の常磐樹ゆれてあれど人はさびし  
も曼陀羅見をり

西藏のはだか菩薩の繪を見れば男のなやみあ  
へて隠さず

獸のつめたき革につつまれて一切經文室にみ  
ちたり

街上

澄みとほり空はもいまだ暮れきらず電車を待  
ちてひもじかりけり

のびるだけは伸びきはまりてぶらたなす秋風  
吹くに音たてにけり

集 鴨

水のべの木の葉はいまだ散らなくに水はいよ  
いよ澄みまさりたり

通 學

福澤の塾の生徒の一人とぞありつつわれの何  
にさびしき

靴のさきに石を蹴かへす何となき嬉しさにし  
も馴れてさびしき

制服の金のぼたんをしみじみといとしさあま  
りまさぐりにけり

慶應義塾図書館。北村四海氏作手古奈

階の下に裸身の手古奈うれひ居りここにはと  
ぼし夕ゆふの光

深夜

いつ果つる思なるらむさもあらばあれ今は寝  
なむよ小夜ふけにけり

更けまさり夜寒ながらに燈は明し悲しきこと  
は考へざらむ

讀書深更に及ぶ。俄に鼻血いでて机上にした  
たる

うつし身は血を漲らすしんしんと家の外には  
草木のねむり

大正五年

七十六首

## 枇杷の花

いつの日に實となるものか  
枇杷の花咲きは咲  
きつつ哀れなりけり

枇杷のはな眼にこそ立たね日を経ればはつか  
に見えて實を結びけり

うつし世の木の実の形さだかにぞ見えそめし  
もよ枇杷の葉の上に

ほし物が乾かぬといふ人のこゑ枇杷の向うに  
こもりてきこゆ

人はみな寝しづまりたる夜を深く薬飲むこそ  
さびしかりけれ

試験前

### 西遊雑詠

新舞鶴。山本文顯君の許に客となりて

春のゆき海の向うの山に積りいとど青める入  
海の色

春のゆき山につもれりこの朝頭あしたにそそぐ井戸  
の水汲みて

雲來り雲去るなべに入海の向うの山の照りか  
げりしつ

山本、木船兩君に誘はれて近き山にのぼる

松の下にひかげのかづら清すがしきを敷きてし酌  
めば酒の樂しさ

山に來てはいたくな酔ひそ然れどもこの樂し  
さと云ひて酌みつも

山に來て食へば樂しもこの壽司をつくりくれ  
しは文顯ぶんけんが妻



## 大江山途上

木の間より淡<sup>あざ</sup>けむり立ちその向うに湛<sup>あ</sup>へさび  
しく海の見ゆるも

連絡船にて。舞鶴港外

荒磯<sup>あらいそ</sup>べに坑口<sup>かちぐち</sup>ありて朝はやく出はひる人の見  
えにけるかな

松ふかき島の端山に咲くさくら霧晴れゆけば  
まつの間にみゆ

福知山跡

どつこいせどつこいせとて手打ちはやししめ  
 やかなれや福知山踊

家さかりはるばるも来て見るものか丹波の國  
 の福知山踊

若丸がをどる手振のをかしさも終にさびしき  
 福知山踊

御大典址

夜をこめて大みまつりに添へらくも庭燎たき  
 けむその址どころ

天地の音なき際に澄みいりつ庭燎もえけむそ  
 のあとどころ

とりよろふ松の木肌にうつりつつ庭燎もえけ  
むそのあとどころ

すめろぎの御代をつがすと大みこと神かみ宣らし  
けむそのあとどころ

ちはやぶる神神あもり遠明るくいましし宮の  
そのあとどころ

下鴨に小島仁君を訪ふ

春のあめ窓の外なる竹林ちきりんに夜ぶかく降りて音  
のせりけり

窓のそと硝子障子のすぐ外の竹に降る雨ひか  
りつつ降る

奈良

春日野にここだ生れし蟆子ぶとのむれ拂ひあへな  
くむらがり來るも

薔薇色の空のあかりに常磐樹の新芽立つこそ  
やさしかりけれ

山の上のあかるきに居て眺むれば野はくらか  
らし燈ひのともる見ゆ

嫩草山

春日野の月夜に立てばあをによし奈良を去り  
ゆく汽車の音すも

寐よと吹く營所の喇叭かなしくも奈良の月夜  
を鳴りわたりつつ

## 法隆寺村

ふさぶさと芽立つ蘭草かぐさの田の遠をちに一つ塔見ゆ  
斑鳩いかりがの塔

晝ふかし法隆寺村に一臺の車きたりて音たて  
にけり

道のはてに車かくろひいや遠きその道のはて  
の一むら木立

## 法隆寺

金堂のをぐらき出でてうつし世の雀の聲をき  
きにけるかな

夢殿の階のすきまの巢をいでて蜂はつるめり  
かがやきながら

蒲公英のたけて飛ぶ日となりにけり夢殿のべ  
の蜜蜂のこゑ

宇治川の早瀬のぼると太綱の手握りかたく舟  
曳くらしも

宇治

挽歌

學友須田實の死をいたむ

まがなしき報知<sup>しらせ</sup>もて來し人の顔おどろさあま  
り見詰めたりけり

この白き柩の中にまなこ閉ぢ臥せるものは友  
の實みづからか

盛りあげし飯に二本の箸をたて供へし見れば  
人のかなしさ

なきがらの實が顔の安けさに笑はむとしてわ  
れ泣きにけり

なきがらの實を見ればあなやすら佛となれば  
かくも安けさ

○

遠からず病は癒えむ打ちよりて酒飲まむよと  
言ひにけらずや

芝浦に漕出し舟やわれも乗り實が漕ぎし忘ら  
えなくに

學校の廊下を歩みうしろより實來ずやとふと  
し思ふも

晴れわたり諸々のものけざやかに眼にうつれ  
ども實はあらぬ

病室の前に一本の無花果あり。去年、病中な  
がらこゝに移りし時は葉はおほかた無かりき

落葉せし家にうつり來いちじゆくの青の芽立  
を見て死ににけり

無花果の青の芽立は秋の樹の落葉するにもま  
してさびしき



○  
 なきがらの實を今し馬車にのせて焼場にやる  
 と時はせまり來

ものみなは陰をかぐるく持つ口なり柩の馬車  
 の動きいづるも

柩をばのせて曳くなりあなあはれ馬は動かす  
 その雙の耳

○

桐が谷に月夜を黒く立つけむり實を焼きて立  
 ちかものぼる

## 九品佛

九品佛は目黒の先。慶應義塾より程遠からずして然も静寂の境なり。學業に倦める時こゝに半日を費すこと屢々なりしが、此の秋また學友泉山、山下兩君と俱に午後の學科を休みてこゝに遊ぶ

夕まけて土にこぼるる銀杏の葉こぼれ溜りて  
音はあらくなく

掃きよせて落葉焚く間も銀杏の樹やまざしこ  
ぼす黄なるその葉を

掃きよせし落葉の中にこもる火の外そとには燃え  
ず煙のみ立つ

銀杏葉の黄葉きはの夕日を眩しみと眼を移したる  
木立のくらす

むさし野の土をゆたけみかくばかり太き老樹  
と銀杏はなりつ

むさし野の奥澤村に年久しくいます佛の膝の  
塵はも

沈む日の光ををしみ秋なれや物食ひあそぶ佛  
の前に

悔もなく忘れてを居れ武藏野のこのみ佛はと  
がめざりけり

禁断の境をやすみ武藏野の鳥のやからは罫と  
なしつ

秋空の澄みふかくしてうかうかと怠けしこと  
の樂しくありけり

武藏野は夕闇はやみ落葉の火もえさかりゆく  
その火色はや

むさし野はま全く夜となりれさろくと尙しも響  
く百姓の車

雑詠

冬期の試験迫りて夜を更かすこと多くなりぬ

物書けば紙に聲あり小夜中の幽けきこゑのか  
くはさびしき

鉛筆の秀ははも鈍りてたどたどし今宵はもはや  
寐むところ思へ

埃

颯さつ々と師走しゅうさ夜空に鳴る風のせまるとすれば埃  
まひあがる

片側に吹きよせらるる小夜埃こよひ眼にこそ立たぬ  
音のさびしさ

五位鶯

五位のゐる樹は落葉して寒からし小夜のくだ  
ちに聲のきこゆる

ひたくらき夜空の下の五位の群かたみに知ら  
ず騒げるらしも

五位驚のむれの騒ぎは間遠けど小夜中にして  
きくに堪へずも

雨の日

玄關の夕かげくらし雨のなかを歸來りて靴ぬ  
がむとす

いそがしく靴をぬぎたり手に残る革のにほひ  
はさびしきものを

われ

ぬばたまの闇の底にし居るわれの息するわれ  
のけはひ聞ゆる

くらがりにおのづと覺めて眼を開くわれの命  
の怪しくもあるか

いましがた笑ひしわれの居鎮り物書きて居る  
怪しくもあるか

大正六年

五十三首

新年

工場のひるの汽笛の今日は鳴らず年の始と思  
はざらめや

ならび立つ煙突に今日けむりあらず年の始と  
思はざらめや



元日の夕さりくれば床の間のをぐらくなりし  
ものかげ寂し

羽子のおと冴えまさりきこゆ元日の夕まけて  
なにか寂しかりけり

## 大阪へ

大阪に職を得て八月十五日夜東京を立つ

東京を去る夜なれかもわが足の土踏むおぼゆ  
東京の土を

雲の間の光するどき一つ星つひに隠れて雨と  
なりにけり

築港なる縁者を頼りて假寓す。家の前の溝渠  
には夕暮何處よりともなく船集りて、高き橋  
を並ぶるなり

住みそむる大阪の夜の夜業のおと枕かなしく  
寐そびれにけり

蚊帳の中の寝ざめ暗しも疊にはこほろぎなら  
む跳ねて居る音

戸開けば虫のこゑ満つ諸のむし磯葦原に夜す  
がら啼きけむ

曉の海の嵐にゆすられておのれと軋む帆ばし  
らのおと

假橋に舟はちかづき暫くは帆ばしら倒す舟人  
のこゑ

突堤ちつていにゆふべ汐騒しほさわやみたれば河内の山に雲の  
ゐる見ゆ

夕されば泊り久しき煙絶つ暹羅軍艦も燈をと  
もしたり

雨とならむけはひの雲は動きつつ遠稻光とほいなみひん  
がしにすも

みち知らぬ工場まちの夜をくらみ薬のにほひ  
咽喉に堪へずも

鈴虫は舟に飼はれて聲ほそし夜くだちきこゆ  
ほそきその聲

## 奈良西郊

唐招提寺

金堂に佛繕ふ人こもり何かかそけき音をさせ  
をり

佛工はこもり久しも金堂のそばの芝生に曼珠  
沙華あかく

毒きのこ長けつつ赤し鐘樓のここの芝生を人  
の踏まねば

薬師寺

曼珠沙華咲きさかる日の照りあつく汗拭きあ  
へずこの寺道に

薬師寺の塔の水煙かぎろひつ揺ぐがに見えて  
秋空ふかし

秋の日のあかるきを來て堂の中すすきみする眼  
にくらさみ佛

裕

たらちねの母がたまひし裕きもの夜戸出寒け  
み今日着そめたり

裕着てこころ静かに坐りけり千日前の燈のあ  
かり見ゆ

## 大正橋附近

くもり日の空より落つる風荒みけむり渦巻く  
巷のなかに

街路樹の枯葉吹きとばす風のむた近き工場  
の硫黄のにほひす

## 櫨

下宿は生玉神社に近き高臺にありて、附近寺院多し。吾が室の向うに聳ゆる屋根も寺にして、見下すところは墓地なり

寺庭にとなり住みつつ櫨の樹のもみぢきはま  
り葉おとすを見つ

榼の實を來あさる鴉おのがじし餓ゑてあされ  
 ば食<sup>は</sup>みこぼしつ<sup>つ</sup>

墓原の手向の黄菊あさなさな見るべくもわが  
 戸ひらくものか

六甲の山なみ日日にあたらしく晴れまさり見  
 ゆ冬ちかからし

### 枇杷の花

榼紅葉ちりつくしたる空廣し今はもしるく枇  
 杷の花さけり

冬かけて實をし結ぶと枇杷の樹はさしも寂し  
 く花咲きにけり

枇杷の花いまこそさすが咲き満ちて眼にしる  
 きからいよよ寂しき

崖の上のはやき朝日に枇杷の葉の雫する見ゆ  
 霜ふりけらし

枇杷の花さすがにこれも木の花の咲きのかし  
 こきにほひを持てり

風すぎつゝおのれひそまる一ときの枇杷の老樹  
 はいつかしく見ゆ

ひもすがら風に吹かれし枇杷の樹の黒々とし  
 て夜に入れりけり

寺庭の一樹の枇杷に降りかけて夜半の時雨の  
 おとの幽けさ



## 枝堀

下宿を出て、源聖寺坂を下れば、穢き堀の入  
り込めるあり。満潮には水岸の石垣に及べど  
も、干潮には底の泥露れて悪臭を放てり。沖  
田橋、福知橋。道頓堀川より入り来る竹筏は  
多くこのあたりにとゞまる

難波のうみ潮干にけらし枝堀に散ち浮うく木の葉  
いまぞ流るる

ほかほかと蒸氣たつ見ゆ朝はやき引潮時の水  
の動きかも

枝堀にふかく入来てひそかなり水み漬づくひさし  
き青竹筏

枝堀に入りてとどまる竹筏まなく濡れれや竹  
はま青さ

枝堀にここだ水漬きて竹青し荷舟はゆくもそ  
の竹に觸り

堀の水うごくとなけれ水の面にうつれる影は  
静けからなく

堀に沿ひて竹小屋多し

竹の上に竹のころがる音ぞすれ小屋の中には  
人ゐるらしも

竹小屋にはこぶ青竹その竹の投出されたる音  
のよろしさ

冷やかに水より揚げし太竹の切口しろく積ま  
れたりけり

竹小屋へかつがれて行く青竹の秀まのゆれせは  
し折々地を打つ

夕景

冬やなぎ町裏堀の夕暮に枝を垂れをり暗き水  
の面に

荷足舟海にはゆかず橋際の暗きにこもり今日  
もまだ居る

夕一とき町裏堀の木橋に人のゆきさきの忙し  
く聞ゆ

病中

夕まけて熱つ  
のり來も眼の上  
にあもき天井か  
ぶさりてゐる

大正七年

四十八首

布引山

溪の間に光さし入り繁木がうれ光るを見れば  
小き枇杷の實

布引に松かげ多し駈上り駈下りあそぶ異國を  
とめ

## 土曜日

勤<sup>つと</sup>終へて街あゆみ居りひさびさに手紙を書か  
むころの湧くも

歸來て何をなすとはあらねども暮果てぬ日の  
あかり樂しも

春近し夕かたまけてわが室にも少しさし來る  
日射<sup>ひさし</sup>となれり

寺庭の木立深けど椿のみ鳥の來てゐる枝のゆ  
れかも

寺庭の一もと冬木眼ぢかきを櫻と見つつ飯食  
ふひとり

隣室に人は居ずけり音立てて食へばうましも  
 これの茶漬を

夕飯をいそぎ終りて土曜日の時たつ早き夜を  
 をしめり

雨ふりてほのほのぬくし夕戸出に羽織をぬぎ  
 てうれしきものを

春近し

### 日曜日

日曜のこもり居さびし浴ゆして時経しからだは  
 いたく冷えたり

日曜を稀にこもりつ晝の間のおのれが部屋を  
 めづらしみ見る

粉雪

はやち風にはかに吹ける外を見れば粉雪ちる  
なり日は照りながら

青々と冴えきはまりて真冬空いまし俄に粉雪  
を散らす

海邊一夜

同僚十餘名と俱に金熊寺溪の梅を見、道を轉  
じて淡輪に出でたり。夕刻より丘上の旗亭か  
どのに小宴を開く。宴果て、既に夜深し。醉  
ひたる同僚を電車に送りて、己はこゝに宿る

磯山の小松がうれの淡路島はるかなるかも月  
夜に見れば



わが立てるあたり明るし曇夜の空と思ふに月のありけり

松風の音のさやけさ今日越えし磯山にして吹くにかあらむ

松風の音のさやけさ聞きつつぞ今宵おそらくいねがたからむ

磯山の風の音には馴れながら冬は寂しとお宇乃はいふも

お宇乃、婢の名

はしけやしお宇乃がのべし床の中に今宵はわれの眠る夜かも

わがどちの酔ひたるどちの醒めはてて働く明日を見ねばならぬか

終夜松風を聞きて眠ならず

いをねずて明方ちかしまがなしく零れし酒の  
にほひはするも

四時までも覺めて數へし時計のおと酒の酔は  
も今はあらぬを

安倍文珠院

古伽藍さはにしあれど飛鳥路の咲きさかる花  
はここにしてみつ

靴の中に入りたる石を取捨てて心は輕ししは  
し憩はな

## 微恙

微恙を得て濱寺の海岸に幾日かを過す

やまひがちに三十路に近く身はなりて遊ぶ暇  
ある今日のわれかも

いささかの病に萎れ出でくれば浪とたはむれ  
千鳥あそべり

人居らぬこの濱邊のつばなの穂見ゆる限り  
は風にそよげり

ひるすぎの沖の曇をおぼほしみかへりみする  
や金剛葛城

松の間に高屋根しるく家居してここに住む人は  
温室をもてり

雲水寺歌會席上

人待ちて朝の間さびし荒<sup>あち</sup>陵<sup>はか</sup>の竹むら見れば竹  
はゆれをり

住吉

住吉翠香庵にて、國民文學社歌會席上

住吉の松の葉しぬぎ降る雨の降<sup>ふり</sup>足りて今は道  
に溢るる

みち知らぬ住吉に来て秋雨の降りあふれたる  
水を渡りつ

風吹けば葉裏ひるがへし川くまに老樹ぞ立て  
る何の樹ならむ

### 父の日

十月十四日。亡父の七回忌なり。鳳林寺とい  
へるは我家の宗旨にてしかも由緒古き寺なり  
と聞き、乃ち獨行きて回向を頼みつ

ここに<sup>お</sup>して御墓はなけれちちのみの父のみ魂  
は吾と俱に<sup>いま</sup>坐す

業に倦みなまけ心をわが父も持給ひけむとお  
もふ戀しさ

たはやすく人に親しまぬわが性は父にやうけ  
し寂しかれども

忌引の届出して勤を休む

忌の日ぞ籠居らなとつぶやさつ陶花瓶に黄菊  
さしたり

こもり居ればのどもあるか日のひかり硝子  
戸すきて膝のべに射す

兄と遊ぶ

十一月一日宇治に行きて

朝鮮に住める久しき兄と逢ひて一日仲よくあそびぬるかも

齡としへだつ兄と弟と幼くて遊びし知らに今日かくし遊ぶ

手紙の終に書きつけて松村君に

言にしていへば易きを口惜しく書きわづらひて止むことの多き

## 病後

ねもごろにからだ洗ひをり夏の日のここに射  
しきて湯屋の明るき

十日あまり病みこやりたり浴あみして疲るる程は  
おとろへ覺ゆ

十日あまり病みて臥りつ櫛の齒に抜けからむ  
髪はいたく伸びにけり

わが病よきにかあらむたれこめて一日居りし  
に腹へりにけり

いとどしく腹へる覺ゆ物欲しき心こらへて樂  
しきろかも



雨ぞらに街の燈<sup>あかり</sup>あかり擴<sup>ひろ</sup>れり一日こもりて家  
をいづれば

○

四天王寺の石だたみみち夜雨ふり足もと暗く  
ゆくに光りつ

大正八年

六十五首

病床雑詠

かりそめの病とおもへど臥ふれれば枕邊しるく  
埃たまるも

仰たかに居ればおのづから見ゆ硝子戸の外に降る  
ゆき刻々つもる

病みこやり寂しきときは枕邊にうごく時計を  
みつつ遊ぶも

病おほきわが身を堪へてこれの世に生くらく  
ほどはつつましくあらむ

病がちに三十路に入りてかなしもよ生くらく  
業にはやも倦みにけり

家刀自のいけし萬年青は優しけど塵置く見え  
てわが病ひさし

枕邊の時計おとたて居たりけり夜ぶかくさめ  
てわが眼ひらけば

## 梅雨の頃

夕まけてひた暗くふる雨ゆゑに仕事終らむ心  
せきたり

珈琲店にて

湯氣たちて紅茶にほへり今のまの心やすさは  
誰に告げまし

貧しけど足れりと思ふ腹みちて千日前をわが  
あゆむなる

阿倍野に下宿して。附近に火葬場あり

電車おりて家なま竝くらし中なか天ぞらにこよひは月の暈かき  
かむりたる

おしなべて勤人住むこのあたり早くとざして  
寐る家の多き

人を焼くにほひしるしも暖き月夜の風の咽喉  
にむせばゆ

梅雨霽

花すぎて人の忘れし石榴の樹ざくる大きくな  
りてをりけり

梅雨はれて風立つたかき梢よりくづれて落つ  
る泰山木の花

## 貴船

六月一日、上杉、高橋兩君と俱に鞍馬より貴船に遊ぶ。折から貴船神社の祭禮にて、神輿の渡御に逢ひしは思設けぬことなりし

山峽に風吹きいでたり光りあひ木の葉みな動くさうさうと鳴りて

今日しも祭ありちふ峽の村みち細くして人にゆきあはず

山峽は青葉くらきに金色の神輿ちひさく通りすぎたり

みこし擔く若者のこゑ峽ごもり聞ゆるごとに遠ざかり居り

このあたり柿の樹多し

柿の樹の若葉は色のさびしきに近づき見れば  
花を持ちたり

照りひかる若葉の中にまさびしく咲き散るも  
のか柿の樹の花

### 六甲山上

九月二十四日。窪田先生及松村英一君と俱に  
六甲山に登る。石屋川に登路をもとめて有馬  
に下れり。同行上杉・高橋・村上・假屋の諸君

この原に秋くさ多しむらさきの桔梗なからめ  
やつばらかに見む

めづらしみ摘みつつ來しを龍膽リンドウのはな頂いたたまきにく  
れば其處にもここにも

龍膽は蕾ふくらみほとほとにこもる紫あらは  
れむとす

肩のへに芒みだるる眞晝山もの言はむとし言  
はでやみにき

片靡くすすき眩ゆき山腹みち消えむとしつつ  
人の帽みゆ

道あらぬ小篠のなかに踏みたるは茸きのこなるらし  
やはらかにして



## 淡路

八月某日。夜十一時大阪築港を解纜して、志筑の沖に日の出を見る

あかあかと濃霧の中に燻りつつまろき朝日あり眩しくもあらず

磯によせて浪碎けたり暫くして浪の音きこゆこの船の上に

淡路は見のさびしもよかはたれの磯にくだけて浪白くあがる

磯のみちを提燈さげて行く人は燈ともして行く既に明けしに

提燈をさげてまださに行く人は既に遠からむ  
家をはなれて

船の上ゆ見つつし行けばこの島に平地ひらちあらず  
山に田つくる

島びとが愛ましみてつくる淡路米とぼし米はも  
味あじよしちふ

## 洲本

風ぎしづむ洲本港みなとに船をすてて遂に踏みたり  
この島の土を

先山せんざんにのぼる

淡路をここと思ふに遙々し稲田あをくして道  
とほく續く

淡路に高山なしと然れどもここゆ見れば更に  
たかき山あり

### 小豆島

草壁村

家のうち覗きて見れば人居らず屋根の豆がら  
ひたかわさゐる

この島に雨の降らざる幾日か道草の葉の埃を  
見れば

寒霞溪

神懸かぶのいただきに来て更にあふぐ圓草山まろくさやまの星  
が城じやうかも

海にたつ晝靄ぬちの遠きやま備前とも言へり  
播磨ともいへり

岩山のあひだに狭く限られし瀬戸内海のうし  
ほの澱み

なづみ來し荒山中に手づくねの陶物すゑぶつやきて人  
の住めりけり

蹉跎村雜詠

九月下旬北河内の蹉跎村に座敷を借りて引移る

鑿井

今日しも湧きたるならむ夜おそく歸來れば水の音せり

水湧くと噂ひろがりたるならむ提燈つけて見に来る人あり

地の底二百尺なる水をひきて青竹筒ゆ噴出でしむる

三十日掘りて辛く噴きいでしこの水にこの井  
の水に土のにほひあり

路傍に蝗を乾せる

むしろ敷きて蝗ほしたり日向には蝗のにほひ  
湧きよどむかも

死際に力のかぎり伸したる蝗の脚のとげとげ  
しもよ

釜に入れて茹でなどやせし赤黒く變れるいな  
ご秋の日に乾す

風なき秋日の照りに赤黒きいなご専らかわき  
つつあり

## 雑草の花

井戸の邊のおどろの野菊さかり過ぎてつめた  
き下駄を今朝ははきけり

顔洗ふ井戸べに眼鏡とりしかば唯しどろなり  
みぞそばの花

田の畔の溝をまたぎて濡れにけりかくは含め  
るみぞそばの露に

枝しげき花とおもひし摘めば唯まばらに咲け  
りみぞそばの花

齒磨粉よみがきのうすくれなるは零こぼれつつしるくしも  
あらず犬蓼の花に

枚方の丘にのぼりて

崖のつち日にかわくなべほろほろと人目なき  
まも崩れつつ居るや

秋の日のあかるく射せる二階家の床の掛物し  
ろくし見ゆも

障子あけて日のうららかに射しいれる二階の  
ざしきに入すわりをり

日あたりのよき家建てて住む人は障子をあけ  
てうららかに住む

稻田の上を吹きとほる風の筋うち光りつつき  
はやかに見ゆ



六甲ゆつづく山なみ北にのび遠低まりて盡く  
る邊やいづこ

枚方

古町の枚方ゆけば軒ひくみ暗き屋内に時計鳴  
り居し

微恙の後に

ゆあみして手拭しぼる手首には聊かたゆき疲  
ありけり

齒みがきの粉のこぼれのいちじるき疊も掃か  
ず四日寝にけり

大  
正  
九  
年

八  
十  
三  
首

折々の歌

寝ねし間に風吹きたるらむ粉の如き南天のは  
な手水鉢にたまる

風なぎし午後のくもりの重々しくれなる濁る  
夾竹桃の花

枚<sup>さか</sup>方の丘につづきて蔭ふかし松に竹まじる蹉  
跎村のをか

母が手にむかしせし如く今日ひとり汗<sup>あせ</sup>疵<sup>ぼ</sup>を洗  
ふ桃の葉を揉みて

山科御坊

山科<sup>やまな</sup>の深井のまみづ汲まむとしをぐらき底に  
釣瓶をおろす

三島江

刈あとに生ひつぎていまだ秀<sup>う</sup>長<sup>た</sup>けずもまたも  
かるらむ河の洲やなぎ

冬  
畑

間引きたる株間ひろけれ寒々と唐菜の白き莖  
たちにけり

葱畑に藁屑かけて防げども葱はしをれて霜さ  
きにけり

年を経てよき茶芽ぶかぬ古株は剪りて束ねて  
軒の下に積む

身  
邊  
雜  
事

明礬の温泉のぬくみ身にもちて丘をおり來も  
枚方の丘を

破るまで足袋はもいたく古りたれど田舎に  
住めば心づかひなし

したしみて言は交さねおほかたのこの村人に  
見知られにけり

百姓のざしき借住み肩冷ゆる曉のさむさに早  
く眼さめつ

肩冷えて眼はさめにけりひつそりと曉の電燈  
まだともり居る

うつし身の寒さに堪へて眼さめるこの曉に  
水は凍らむ

ひとり身は俵の底に湿けこぼる炭をつかみて  
指を痛めぬ

戸の外の厠にかよふ縁のひえ足に冷えとほる  
夜寒を起きて

電車ゆけば響きて音をたつるなり寂しきもの  
か湯ゆ沸わしの蓋ふた

田の畔に藁を焼きたる灰なれば火鉢にとりて  
まじる糶がら

### 村に住みて

中尾義信君の家にて

仰ぎつつ筆のはこびを眼にたどる長押の上の  
柳里の額が

青木<sup>あき</sup>賊<sup>と</sup>ふかく繁れる中にしてすわり豊けき大  
石ひとつ

明方に眼覺めて

音聞けばしみみに降れる雨ながら障子は朝の  
あかりして來ぬ

宇治

二月八日、上杉・高橋兩君と俱に宇治に遊ぶ。  
黄檗山にて

雪のおと松に幽けしこの大き寺のいづこに人  
は住めるや



人居らぬ伽藍の歩廊ゆきしかば雪の音せりそ  
の裏山に

鴨ひんとりはあまたは啼けど裏山にこもりて飛ばす雪  
の降れば

堂の屋根白くなるまで一しきり霰降りしきや  
がて止みたり

三室戸より天が瀬に越ゆ

茶ばたけの畝間うすま畝間にいちじるく消か残るほど  
は降りし霰か

ふりさけて見上ぐるわれに壓しかかり崩れむ  
とするあまた大岩

硯

朝鮮なる兄より贈られたる

朝鮮の海州といへば生きてわが踏む日なから  
む其處ゆ來し硯

海州はいづこなれかも其處ゆ來て硯いまあり  
わが手の上に

かがなべて待ちにし硯いまはありこれの現まの  
わが手の上に

机の上とりかたづけけて一つ置く大き硯しゆた  
けかりけり

見ればただ空の色なし  
 軽げなり持てばおもた  
 き海州の硯

新しき硯の面のあやしかも  
 水は弾かれ玉とぞ  
 かたまる

持古りし小さき硯と入れかへて  
 海洲のすずり硯  
 箱にあまる

## 室津

上杉・春田・高橋の諸友と俱に播州室津に遊ぶ。  
 七月十七日龍野に汽車を捨てて、夜既に深し。  
 田舎道二里。峠一つ越して漸くに室津なり

提燈のあかりが圓くわが上の繁みにうつり  
 山の夜はふかし

山の上に更澄<sup>す</sup>める星見るがうちに色變りをり  
この静けさを

變光星

眼下には夜目に廣けし水明りこもり江ふかく  
たたへたるらし

山にふかく海が入りこみ足もとの遠きところ  
の浪の音きこゆ

提燈をかざして見れど眼はとどかず崖の眞下  
に寄る浪の音

山の鼻を廻れば人の聲きこゆ船の燈が見ゆす  
ぐそこの海に

魚問屋佐藤氏方に一泊す

廣土間に入りて吹消す提燈の蠟のほひを束  
の間嗅ぎつ

よもすがら海のかたより通ふおと遠磯浪かそ  
の幽けきは

早出の船のさわぎを耳近くうつらうつらに知  
りつつ寢居ねをり

その朝

昨夜よべくらく通りし道のすぐ下は朝の潮ふかし  
岩間岩間に

深海ゆ手繰りてあぐる章魚壺の限りあらずし  
て見るに寂しき

加茂神社境内眺望。驟雨屢來る

深海のたたへは濃ければつとりと一つ小舟に  
章魚を釣る人

高さ屋のここの眼下の深海の底のかくり岩す  
さとほり見ゆ

沖べには八十の家島小豆島四國のやまも雲の  
間のみゆ

満つとひくと迫門こす潮の早ければ君島が根  
は赤く崩えたり

松にまじり若竹生ふる辛荷島あまり眼近み忘  
れて見てゐつ

日照りあめ海よりしぶき高き屋のここの疊は  
ぬれて涼しも

夕立は遂にかも來し殿濱に避けたる船も苦ふ  
けり見ゆ

古島の豊辛荷島ゆふだちに濡れてさやけくか  
げも亂れず

海にさす高き松より雨雫おちてゆく見ゆ一つ  
ぶ一つぶ

夕立の過ぎたる松の繁みより雫おちやまず深  
うみの上に

再び佐藤氏方に歸りて晝飯を振舞はる

奥まりし家のいづこか鈍きおと時計の動く音  
のしてをり

魚市の籠の中に跳ねまはり居し蝦えびを朝見て晝  
は食くしにけり

七曲海岸

岩の間は磯草とぼし莖長に黄花萱草さきてあ  
らはなり

印い南な野のゆ長くのび出でし洲のはては海にまぎ  
れて見のさだならず

海にむかふ禿山裾に煙突たちすべもあらぬか  
も煙はなくて



洛 北

詩仙堂

箒目のしるき庭砂はだしにて人の踏みたる大  
きあとあり

疊より陽炎たてり午なちかき秋の日ざしは屋内  
にふかく

縁先にころぶし居ればわがからだな日向なたくさく  
もなりにけるかな

八瀬に近道すとして小徑に迷ふ

ひえびえし日陰窪地の柿おちば深くもぞ溜る  
今も落ちつつ

なまなまと重き柿の葉この峽を遠くはとばず  
落ちたまりをり

散りたまる落葉の下のこもり水ふめばしみ出  
でてわが靴ぬらす

草やぶの零餘子の玉はもろきかも觸るるすな  
はちこぼれ落ちにけり

大原に入りて

狭筵にしき乾す大豆ひあがりて莢のそり反る  
けはひこそすれ

大原に腹へり着きて晝飯の鯛をわが食す心せ  
きつ

寂光院

堂のなか暗くつめたし暫くを尼は石うつ燈を  
ともすとて

山やま水みづのたたへを淺み動きゐる緋鯉のあかさ眼  
ゆ離かれがたし

歸途

夕日ゆふひあたる秋山あきすその木群きぐらより煙まつすぐに  
のぼりつつをり

南瓜の花

ひとり生なまの南瓜なまの蔓つたみちに伸のびび大き花はなひらく  
秋かたまけて

秋まけて南瓜の蔓つた伸のびびやままずよく見れば青あおき  
なり花のつぼみ

彦根城址にて

裾すそべよりや々に夕ゆふせまる伊吹山いぶきひさしく見る  
に雲嶺うんりやうを去さらず

いただきゆ山腹やまはらかけてすさまじく土の崩くずれえたる  
伊吹山いぶきかも

土くえの片<sup>な</sup>面<sup>め</sup>あかさに裾<sup>すそ</sup>べよりくらみそめゆ  
く伊吹山かも

低山のかさなり曇る西のそら日は残るらむ雲  
のあかりあり

うしろべの山に重<sup>かさ</sup>りて竹生島さだかには見え  
ず暮れそむる湖

眼の下に翼ゆたかに張るゆるゑに鳶のかけりは  
おほどかに見ゆ

裏<sup>うら</sup>湖<sup>うみ</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>しづけみ打群れて漕<sup>こ</sup>ぎかへる舟ここ  
の江に満つ

そここの木むらが中に暮れそめて町の家々  
まだ燈ともさす

庭  
燎  
終

この集は、順當に行けば、昨大正九年秋頃までには出来る筈であつた。實際、原稿の整理も半ば以上進んで居り、松村君の手で出版の手筈も調つて居たのであるが、扱、整理の歩をすゝめようと思つて、原稿に向つて見ると、満足な歌の一首もないのに心挫けて、失望して、何時も筆を擱いてしまつた。いよゝゝ出版の決心をしたのは、今年にはひつてからのことである。それは、今年は多くの歌集が出版されるだらうと云ふ豫測が、私の心を浮立たせたにも依るが、逢ふ機會の最も多い川田順氏、國民文學の社友、さう云ふ人達から、絶えず鞭撻を加へられたのに依ると云つてよい。その外にも、意外な未知の人々から、屢々出版を促す手紙を寄せられたことが、

どの位、私に勇氣をつけて呉れたかわからない。さうして、兎に角、貧しいながら、『庭燎』一巻が出来上つたのである。私は先づこれ等の人々に感謝しなければならぬ。

私をはじめ窪田空穂先生の門にはひつたのは、明治三十八年の秋であつた。爾來十五年、その間、同門の諸先輩と共に、『白露集』、『黎明』の二つの集を編んだことはあるが、單獨で集を出すのはこれが初めてである。歌を詠みはじめた中學時代のことを考へると、随分遠い氣がする。それが、今にして漸く、歌數三百八十五首ばかりの渺たる集になつたのかと思ふと、原稿を前に置いて撫然

たらざるを得ない。歌數の少いのはまだしも、かう纏めて讀み返して見ると、今更ながら心境の未熟さが恥しい程である。私の歌はこれからだと思ふ氣がする。かうしては居られない氣もする。それにしても、これ迄の過程を考へると、生來病身で怠惰な私には、恐らく長命しないであらう私には、向後二千首の歌は詠めないかも知れない。さうして幾何の秀歌を残し得るのだらう。こんなことまで考へて、私は更に撫然とするのである。

この集を編みながら、私はいろ／＼の人を思出して居た。

私に最も近い周圍の人達のことを先づ考へた。その人

達は「夜は私には退屈で困ります」と云ふ代りに「あなたは、夜、うちに歸つて何をして居ますか」と私に對つて尋ねた人達である。正直に云へば、私はその人達に對して、かなり誇を感じる。それは、その人達が纏つた何もしなかつた間に、兎も角も歌集が一冊出来たと云ふ淺はかな誇である。然し矢張り寂しい氣がする。その人達に私の歌集が何の權威もあるまいと思ふから。

私は、酒井溪水君と宗耕一郎君とを思出して居た。共に同門の先輩で、歌をはじめた當時の私は、兩君の歌を愛誦したものである。さうして、兩君とも久しい以前に消息を絶つてしまつた。この兩君が何處かで私の歌集を讀んで呉れ、ば好いと思ふ。「まだ歌など詠んで居たか」

と笑ふかも知れないが、無下に貶しめるやうなことはないであらう。何か良い點を見つけて佳い言葉をかけて呉れるであらう。知己の少い私には、殊に兩君のことが思出されるのである。

私はまた、故人になつた須田實と小島仁とを思出した。須田實とは慶應義塾に一緒に學び、彼の爲に私はこの集唯一の挽歌を詠んだ。けれども若し生きて居たら、良い交は續いたであらうが、私は彼の爲に歌は詠まなかつたであらう。彼はまた、私の歌集などは顧みもしなかつたであらう。小島仁は古い歌仲間で、彼がまだ京都醫科大學の助手をして居た頃に、私はその下鴨の下宿を訪れて、



二首の歌を詠んだ。生きて居たら、私の歌集が出来たことをどんなにか喜んで呉れるに違ひなかつた。そのくせ私は彼のために、たうとう一首の挽歌も詠めずにしまつたのである。

最後に、多くの人々に心から感謝しなければならぬ。

出版のことで絶えず心配して戴いた窪田先生に、先づ感謝の辭を申上げる。松村英一君から萬端の面倒を見て貰つたのを殊に難有く思ふ。わざ／＼打合せの爲に大阪まで来て貰つたりして、濟まないことである。序だから後の思出の爲に書くが、この集、編輯は北河内蹉陀村の寓居で成り、今この文を綴りつゝあるところは大阪市内

である。恰度、轉居の際に松村君が來合せたので、手傳つて貰つて荷物を運び込んだ儘、二人で宇治に遊んだ。四月十四日、宇治川堤の櫻がちらちら散る日であつた。その晩は一杯の酒に陶然と酔つて、花屋敷の静かな一室に枕を並べて寝た。色々な事件が重つたもので、私は又その時、職に離れなければならぬやうになつて居たのである。廣部きよの夫人から、意外な援助を得たことは非常な喜びであつた。この本が立派なものになつたのは全く夫人の賜である。松岡映丘、人見少華兩氏が御忙しの中を執筆して下さつたことは感謝に堪へない。人見氏には心やすだてから、色々無理な注文をしたのを、快く容れられたことは有難い次第である。ポブリンの買入に

は富谷三郎君を煩した。さうして思通りの品を手にする  
 ことが出来て難有いと思ふ。半田良平君からは口繪の世  
 話をはじめ、色々私の氣のつかない注意を與へられた。  
 深く感謝する次第である。その他、川田順氏をはじめ、  
 上杉一市春田有道・高橋榮治の諸君から、絶えず注意や刺  
 戟を與へられたこと、前田隆一君が快く出版を引受けて  
 下さったこと、尙屢々應援の言葉を投げて下さった未知  
 の人々、さう云ふ人達には心から感謝の意を表して置  
 きます。大正十年四月二十九日、大阪市船越町の寓居に  
 於て壽樹記す。

庭 燎

定價金貳圓參拾錢

大正十四年十月一日印刷  
 大正十四年十月五日改版

著 者 植 松 壽 樹

發行者 前 田 隆 一  
 印刷者 東京市日本橋區元大工町一番地



發 行 所

東京市日本橋區元大工町一  
 番三三六番  
 振替東京三三六番  
 振替長野三二六八番

紅 玉 堂 書 店



● 書叢歌和釋新行刊堂玉紅 ●

半田良平著

[1] 大隈言道歌集

近來民衆歌人の名に於て、頗にその高手を謳はれて來た大隈言道の短歌約二百首を撰び、一首一々に「語議」「大意」「評言」を附して、その間に自ら言道の歌の特質を説いた絶好の評釋書。著者の藝術批評家としての非凡の眼識に就いては世既に定評がある。

橋田東聲著

[2] 正岡子規歌集

歌人としての正岡子規については、その眞價を十分に知るものは極めて尠ない。今、現歌壇の子規信者たる橋田東聲氏は、本書に於て子規の歌を拔萃し、多年の蘊蓄を傾けて之を釋し、これを批判してをる、まことに新興歌壇の一異彩である。

尾山篤二郎著

[3] 源實朝歌集

『金槐集』七百十九首より代表的秀歌百四十首を選び、著者獨特の輕妙洒脱なる筆致を以つてその語義を究め歌意を明かにし、且つ峻刻犀利なる批評眼を以つて縱横無碍に實朝の作歌を品隲したものである。附録として『實朝覺書』『實朝風流日記』等を附す。

半田良平著

[4] 香川景樹歌集

我が桂園派の創始者なる香川景樹の歌一首々に就き、懇切なる註釋を加ふると同時に、その藝術的價値を縱横に評騰して、以て景樹の歌の特色を一目瞭然たらしめて居る。桂園派歌人は勿論、新歌壇の人々にも一讀を薦むる次第である。

相馬御風著

[5] 良寛和尚歌集

著者相馬氏は、人も知る如く夙に良寛に私淑し、其生活及藝術の研究に没頭すること多年、良寛の歌百八十餘首につき、一々懇切周到を極めたる註釋を施す傍ら、眞にその滋味の存するところを何人にも肯き得るやうに説かれたものである。

宗 不旱著

[6] 柿本人麿歌集

昔から歌聖と仰がれて居る人麿の短歌約百首、長歌數篇に就き、一首毎に懇切なる註釋を施すと同時に、それらをもつ藝術的特質をも明快に把抓し、以て人麿の個性を一目瞭然たらしめたものである。著者は最近歌壇の大家の業績をその辛辣なる筆を以て、縱横に評騰し去りたる不旱生。

● 書叢歌和釋新行刊堂玉紅 ●

# 紅玉堂出版文藝書目

## ◆紅玉堂出版文藝書目◆

石川 啄木著	啄木歌集	定價六錢
國木田獨步著	獨步詩集	定價一圓十錢
半山 良平著	短歌新考	定價二圓三十錢
松村 英一編	現代短歌用語辭典	定價一圓八十錢
鷹野 つぎ著	小説ある道化役	定價二圓五十錢
松村 英一著	歌集やますげ	定價十三錢
花田比露思著	歌についての考察	定價二圓五十錢

## ◆紅玉堂出版文藝書目◆

尾山篤二郎著	處女歌集	定價一圓八十錢
半田 良平著	歌集野づかさ	定價十二錢
土岐 善麿著	歌集緑の斜面	定價二圓五十錢
新島 榮治著	詩集濕地の火	定價一圓三十錢
同	同隣人	定價一圓五十錢
若目田三郎譯	ロシアの鐘	定價九錢
浦瀬 白雨譯	現代英米詩選	定價一圓五十錢
西村 陽吉著	歌集第一の街	定價一圓九十錢

◆紅玉堂出版文藝書目◆

橋本 墨花著	花	こ	花	言	葉	送定	費價	八	一圓八十錢
新井 紀一著	小説	雨	の	八	號	室	送定	費價	八
伊藤 恣著	表現派 戯曲集	生	血	の	壺	送定	費價	八	一圓五十錢
河井 醉著	近代詩用語辭典	送定	費價	八	一圓八十錢				
紅玉堂 編輯局編	活用現代新語辭典	送定	費價	八	一圓				
石川 啄木著	啄木遺稿	送定	費價	十	一圓七十錢				
窪田 空穂著	短歌隨見	送定	費價	十	二圓五十錢				
松村 英一編	代匠記、考 略例、古義	萬	葉	集	送定	費價	十	二圓八十錢	

◆紅玉堂出版文藝書目◆

半田 良平著	芭蕉俳句新釋	送定	費價	十	三圓五十錢	
同 編	季題別 年代付	芭蕉俳句全集	送定	費價	二	三十五錢
服部 亮英著	漫文	もぐらもち	送定	費價	八	二圓
村田 光烈著	土を流るる永遠の愛	送定	費價	十二	二圓	
尾山篤二郎著	歌集草籠	送定	費價	十	二圓五十錢	

◆詳細目録は葉書に依つて「紅玉堂タイムス」を御申込願います◆

◆紅玉堂出版文藝書目◆

服部 亮英著	スケッチと漫畫自在	定價 一圓三十錢 送費 六錢
進藤 延著	硬球 テニスの智識と競技	定價 一圓三十錢 送費 八錢
勝山 香月著	詩集 さびしき人々へ	定價 九十五錢 送費 六錢
同	詩集 哀別	定價 一圓二十錢 送費 六錢
松原 至大著	詩集 海の愛	定價 八十五錢 送費 六錢
松村 英一編	現代一萬歌集	定價 二圓三十錢 送費 十錢
尾山篤二郎著	短歌五十講	定價 二圓三十錢 送費 十錢
窪田 空穂著	歌集 泉のほとり	定價 一圓 送費 八錢

郵便かはき

東京市日本橋區元大工町一

紅玉堂書店行

一錢五厘  
切手  
貼付

紅◆

服部 亮英著

スケッチと漫画自在

定価 一圓三十錢  
送料 六錢

進藤 延著

硬球  
軟球

テニスの知識と競技

定価 一圓三十錢  
送料 八錢

愛読者カード No.

御住所	
氏名	
書名	
この書籍をお求めになつた書店の名	

まことに御手数ですが上記各欄に御住所 氏名を御記入の上御投函下さる様に御願ひ  
いたします。このカードによりまして弊堂出版報告とその他の通知をいたしたる存じ  
ます。



